歌姫
シャンテ・セイレン
―獄にて咲く淫ら花―
立ち読み版
小説 夜士郎
挿絵 こうきくう

プロローグ　006
第一章　始まりの音　023
第二章　肛哀歌　055
第三章　獣欲哀歌　082
第四章　後輩たちとの協奏曲　118
第五章　歌う箱　163
第六章　センリツの歌姫　198
エピローグ　251

登場人物紹介

Characters

シャンテ・セイレン

魔力の籠もった歌“魔歌”で兵士たちを援護する、センリツ国聖歌隊の歌姫。その華やかな容貌と歌声で、国民たちからアイドル的なカリスマを集める。

ノイジー・アラクレア

聖歌隊の No.2 で、シャンテをライバル視している貴族の娘。高飛車な性格。

カンタル・ノエン

聖歌隊を取りまとめるシャンテの上官。彼女の才能を見出し育て上げた、貴族の中年男性。

「いい光景だ。あのシャンテが、私の尻孔を舐めている。四つん這いで、尻を振って、犬のように美味そうに舐めているぞっ。くはっ、はっ、あはははははははははッ」
嗤いながらカンタルは、熱くペニスをしごき続ける。その生殖器官に触れろとは言わない。ただただ嬉しそうに、目に涙すら浮かべながら、彼は鼻息荒く自慰を続ける。
じゅちゅっ……くちゅっ！　にゅちゅっ……ちゅぅぅっ！
糞孔から香る悪臭に目が潰れそうだ。舌肉が、括約筋に喰い千切られそうだ。
「う、うう、うぐぅぅぅっ……っ！」
舌が穢れる。穢れていく。ああ、こんな舌で綺麗な歌を唱えるのか。
（みんなっ……みんな。私、負け、ないからっ……）
哀れなる歌姫はその細い肩を悲哀に震わせながら、肛門内の舌肉清掃に精を出す。
「シャンテっ……！　おお、おおっ！」
カンタルの腰がぐうっと迫りあがった。びくびくと、両脚が引きつれる。体温が上昇し、身体を震わせる。なにかが、男の内から溢れようとしていた。
「四年だっ……四年ぶんだっ……いくぞ、いくぞっ！　くぉおおおおっ！」
「きゃぁあ!?」
瞬間、彼は両脚を開くと、桃色の髪を掴んで引きずりあげたのである。
いきり立つ肉棒、脈動する男根の孔は、獣が吠えるかのように口を開いて。
ビュプゥゥゥゥッ！　づびゅるるぅぅぅぅっ！　どびゅびゅ！　どびゅ！　どびゅ！

「ひぃいいっ！　な、なにっ、あぶぅぅっ！」
その先端から噴出する粘塊がシャンテの美貌へとしたたかに叩きつけられた。
「ぐぅっ……！　かっ、こんなにっ……くははっ、でるっ……！」
ビクビクと腰を震わせて、涎を垂らしながら彼は恍惚と顔を蕩かしていた。
どびゅるるうっ！　びゅびゅぶびゅっ……！　びゅるる……。
「く、止まらん、止まらんっ！　ウグゥゥッ、ォォオオォッ……ッ！」
熱い飛沫が小鼻にぶつかり面貌のすべてに弾け飛ぶ。睫（まつげ）に絡み、額に張りつき、唇を濡らしてゆく。それは熱く、粘ついて、歌姫の美貌を覆ってゆくのだ。
どぷどぷ、どぷどぷ、飛び出す白濁は止めどない。桃色の前髪にそれが絡み重く垂れる。
悪臭が鼻腔を貫く。腐った魚介類のようなたまらない臭気だ。
（汚いっ……臭いっ！　なにこれっ、なんなのよぉっ……）
ようやくその噴火は終わり、カンタルが髪から手を放す。その場に女の子座りでぺたんとへたり込むシャンテは、顔面にコッテリと白濁を乗せたまま茫然自失の態（てい）であった。
「こ、これ、なによぉ……っ？」
「お、おうおう……そうだ。これが男の精液だ。ザーメンだ。っ……くはぁあ……」
彼はうっとりと、自分のザーメンで化粧された、歌姫シャンテを眺めていた。
「ふふ。くはは。ずっとこうしたかったのよ。ああ、シャンテ……」
カンタルの手が、肉液まみれの美貌へ伸びる。その指が、ぬたぬたと、顔中に精液を塗

り広げてゆく。まるで化粧の乳液を、撫でて広げてゆくように。
「ひ、ひぃぃ……」
あまりのおぞましさ、気持ち悪さに、動けなかった。
そうして彼は、その指を、シャンテの喉にまで持ってゆく。
ぬるぬるとシャンテの喉首に汚らわしい欲望の爛れ汁を塗り広げるのだ。
「犬が木に、匂いをつけるだろう。これは、それだ」
鼻腔を貫く青い精の汚臭。生暖かな粘液から伝わるカンタルの、偏執の意志に喉が鳴る。
「二週間……まったく楽しみだ。お前は一体どんな痴態を晒してくれるのかな」
「……負けない」
首を巻くカンタルの手。いつそれがまた締めつけてくるかもしれず、だがシャンテの翡翠の瞳は強く彼を睨めつける。
負けない。
負けてやらない。
こんな男に、私が。このシャンテ・セイレンが屈してなるものか——。
汚濁にまみれても美しさを失わない、戦場の歌姫がまたここに輝きを放つ。
それに対するカンタルの顔に浮かぶのは、果てのない歓喜。
「それでいい。それでいい、それでいい。いつまでも愉しませてくれ。どこまでも悦ばせてやろう。私がこの世で一番、お前を愛しているのだからな」

第二章　肛哀歌

シャンテ・セイレンは一個人でなくあくまで聖歌隊の一員だ。
聖歌隊とは国軍であり組織である。彼女はその中の歯車にすぎない。
とはいえ歌士として絶大な力を有し、様々な戦場で功を積み上げたシャンテの地位は聖歌隊の中でも高い位置にある。今や、カンタルに次いでの階級である。
まあそれが、貴族出身の歌士たちのやっかみに繋がっているのだが。歌士だけは、生まれに寄らずその才を認められるという、王族の決めた事柄が、貴族連中には甚(はなは)だ不快なようだ。シャンテとて、様々な嫌がらせに耐えながら、ここまで上り詰めたのだ。
そんな彼女の仕事として、後進たちの育成というものがあった。

教室の前面には大きな板が張ってあって、そこに無数の紙が張りつけられている。歌士にとっての基本事項が並べられた、指導用紙だ。
シャンテの前には腰高くらいの教壇があって、向こうに三十ほどの椅子が整然と並べられていた。けれどその椅子を占拠しているのは、いつものように三人だけだ。
シャンテを慕う三人娘。みんな、同じ貧民の出の女の子ばかり。
三つ編みのリィナ。ショートカットのクラン。黒髪ロングのケティ。

可愛い後輩たちである。
歌士はそのほとんどが貴族出身の子どもたちで構成されていた。そんな貴族の歌士たちは、唾棄すべき、貧民出身の歌姫に魔歌を習うことなどできないらしい。シャンテの教室に、顔を出したこともなかった。まあそれはそれでいい。いても邪魔なだけだ。
「シャンテ様。それ、さっきも言いましたよ？」
と。ケティに指摘されてはっとする。思考が、飛んでいた。
「そ、そう？　ごめんなさいね？」
「し、ししシャンテ様ッ⁉　お疲れですか？　お身体は、大丈夫ですか？」
リィナが心配そうに突撃してくる。その顔面をぐいと押し返し。
「問題ないわ。というか、あなたたちが私を心配なんて、十年早いわよ」
「そうそう、そうよっ。まったく二人とも、心配性なんだからっ」
クランがそう言って、リィナを引き離す。そうしておいて彼女はシャンテの手をぎゅうっと握ると、キラキラとした眼を向けてきた。
「でもシャンテ様っ。なにかあったら、遠慮なく、私に言ってくださいねっ」
「あ、ずるーいっ、クランっ！」
「わ、わわ、私もですぅ。このケティにも、言ってくださいぃ」
「ああうるさいっ！　いーから席に戻りなさいっ！　……怒るわよ」
ぴしぃっ！　と三人ともが席について背筋を伸ばした。

「さて、それじゃあ、えっと……この続きだっけ。歌というのは、意識も大事。肺を膨らませて、押し下げる、お腹の底から声を出す、肛門を、締める。これらを意識しながら意識せずに唱うこと。身体の中に歌を響かせるのよ」
「こ、肛門、ですか」恥ずかしそうに、ケティ。
「そ。大事なのよ、お尻の孔は」ほら、立ってと指示して、三人を立ち上がらせる。
「お尻の孔をぎゅうって締めながら、大きく声を出してみましょうか。さん、はいっ」
「「「あ～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～」」」
三人娘の可愛らしい声が、教室の中に響き渡る。
まだまだ声量も肺活量も足りないが、まずまず綺麗な声だ。
「そうそう。その感覚をそのままに歌い続けることが第一。肛門を、ぎゅぅ～～って締めて歌い続けるのよ。はい、それじゃあ……」
と、続いての指導を行おうとした――その時であった。
三人娘が揃って、ふらりと頭を揺らし、膝を落としたのである。
「あ……あれ？」「なに？　なんだか……眠い」「あ、頭が……」
少女たちは茫洋と表情を緩ませて、そのまま椅子をなぎ倒しながら床の上に倒れ伏す。
「な、なに？　どうしたの、みんなっ」
リィナを抱き起こしてみるも、少女はぐったりと首を落として反応しない。
意識が、ない？　なにが――と狼狽していると、

「ふむ。よく効くものだ。さすがは王宮魔術師のアイテムだな」
——聞きたくもない声が。背後から聞こえてきた。
「……カンタル」
肥満体が、教室の中へ入ってくる。その眼は愉しそうに、後輩たちを眺めている。
「……魔術で眠らせたの。いったいなんのつもり」
不吉な予感が、胸中に渦巻いていく。後輩たちを庇うようにしてカンタルと向かい合う。
「この子たちに、手を出さないで。私だけを——」
「もとより。特別授業を行おうと思ってな。お前にだけの、特別な授業だよ」
ニヤニヤと気色悪い笑みを浮かべながら、カンタルが顔を寄せてくる。思わず、後ずさりそうになって——背後の、後輩たちを思い出し、踏み留まる。
「ここで……こんなところで、なにかをさせようというの？」
そこはシャンテにとって、日常の世界である。シャンテ自身が長い時間を過ごした教室で、後輩がいて、怒ったり笑ったりしながら歌を教えてきた。
そんな日常すら、この男は穢そうというのか。
「ふん。特別授業？　この、シャンテ・セイレンに、いまさらなにが必要というのかしら」
髪を掻き上げ、胸を張って、カンタルを睨みつける。
「もうこの国に、私以上の歌士なんていないじゃない」
「それはその通り。センリツの星、シャンテよ。なあに、私のそれは、基本だよ。先ほど、

お前が教えていただろう。それ、その程度の――基本だ」
嗤いながらそう言って、彼が取り出したのは――水袋であった。
獣の皮を袋状に縫いつけて、金属製の吸い口を取りつけたものだ。彼がきゅと水袋を握ると、その先端から真っ白な液体が溢れ出てきた。ミルクの匂いが香る。山羊の乳だ。
「教壇に手をついて、後ろを向け。尻を突き出せ」
「……な、なによっ、なにをしようっていうのよっ！」
「だから、特別なトレーニングだ。いいから言う通りにしろ、私の歌姫」
低い声で命じられる。思わず反発しそうになって、けれど背中にある少女たちの存在が、歌姫の反抗心を封じ込める。
「っ、くっ……っ！」
呻き、シャンテはカンタルに背を向けると両手を教壇に置く。尻を突き出すと、白く可憐なスカートがふわんと揺れて、引き締まった両脚の脚線美がVの字を描く。
スカートを、捲り上げられた。
「ククク。Tバックは止めたのか」
「うう、うるさいバカッ！」
かっと怒鳴り返すシャンテのヒップは、レースの編まれたショーツで包み込まれていた。歌姫の清純さを彩るような、真っ白なショーツである。カンタルの欲望を助長する、露出度の高い下着など、つけてはいられないと思ったのだけれど。

そのショーツを半ばずり落とされた。お尻が半分まで、カンタルの前に露出する。
「おお、見えた見えた。お前の尻の孔が丸見えだ。ククククッ。ピンク色で、綺麗なものだ。おうおう、私に見られてヒクヒクしているぞ。まるで魚の口のようだ」
「う、うるさいってのよぉっ……！　この、ヘンタイッ……！」
全身が、熱くなる。排泄の孔。身体中で一番汚いところを眺められている。アイドルヒップを突き出して、肛門を見せつけるようにして。
その尻孔に――「ヒィッ⁉」カンタルの指が、触れた。くにくにと、子どもが棒きれでイソギンチャクをつつくように、皺孔を押してくる。それに可憐な窄まりは反応して、きゅぅうと縮んでクパァと盛り上がってみせた。
「キュウキュウと、よく動くケツ孔だ。ピンク色の内粘膜が、尻の中に出たり入ったりしているぞ。はは、尻が赤く染まっていくぞ。恥ずかしいのか」
（あったりまえでしょうっ……！）
毒づく。そんなところを触ってなんのつもりかと――そう思っていた、その時だ。
「ひゃんっ⁉」奇妙な悲鳴とともに、ヒップが跳ね上がった。
尻孔に冷たい感触。水袋の呑み口が、歌姫のアヌスに押し当てられていたのだ。
「なっ……なっ……な、なにを、するのっ……」
「ふふ。お前の、ケツ孔の締めつけを、強くしてやるのさ――」
そう言って、カンタルは。呑み口をシャンテの桜色の排泄門へと突っ込んだ。

「あぁーッ！」
紅菊を開く冷たい感触に顎が跳ねる。人差し指ほどもある金属口が、可憐な菊の花を散らして潜り込む。なんだ、なんということをするんだ、この男は。
「さて。次になにをするのか……わかるな、シャンテ」
「ああ、まさかっ、まさかあなたっ……っ！」
呑み口の向こうには、乳の詰まった袋がある。
皮袋をぱんぱんにするくらいに、たっぷりと溜め込まれた羊のミルクだ。
「や、やめなさいっ！　そんなのキタナイ、きたないわっ！」
「クク。さあて。下の口は物欲しげに、ヒクヒクしているけどなぁ」
それはただの生理反応だ。埋没したそれを吐き出そうと括約筋が活動しているだけだ。
カンタルが呑み口をぐっと押すと、菊孔はそれに抵抗してぎゅうっと縮こまる。
「自分からコレに噛みついたぞ。呑みたがっているようだから、呑ませてやろう。動くなよ。後輩たちが、どうなってもよいのなら、構わんが」
「あうっ……っ」歌姫は悲哀の吐息を漏らす。ぐっと歯を噛んで、後輩たちに眼を向ける。
「やりなさいよっ……！　好きなように、すればいいじゃないっ」
「ほぉ、そうか。そんなに浣腸が欲しいか。ならばくれてやろう」
嘲るように口の端を吊り上げカンタルは、水袋を強く握りしめた。
尻の中に、冷たいモノが流れ込む感触。細い肩が震え、全身に鳥肌が立つ。

「ああっ、ああああっ！　は……はいってるぅっ……!?　お尻の中に、みるくがっ……」
瞳を見開き、信じられない思いでシャンテは、直腸に羊のミルクを浴びていた。
腸内に流れ込んでくる液体の、ざあざあという音が聞こえるようだ。
「きっ……気持ち悪いっ、気持ち悪い気持ち悪いっ……！」
「ふふ。ごくごくと呑み込んでいくな。どんどん入るぞ、面白いな、ククククッ」
実に愉しげにカンタルは、シャンテのはらわたへ白濁液を流し込んでいく。ぎゅう、ぎゅうぅと絞られていく水袋。まだか、まだ、終わらないのか。早く終わって。
早く、早くっ――！
ちゅぽんと、金属口が引き抜かれた。
「お……終わった……の？　っ、ヒィイ！」
首をねじ曲げ、カンタルを向いて――シャンテの唇から、恐怖の音が漏れた。
彼の手には、新たに二本の水袋がぶら下がっていたのである。
「終わった？　なにを言っている。まだまだ、これからだぞ」
「やっ、やめ、やめっ、ひゃぁあんっ！」
金属の飲み口がまた括約筋を貫通する。そうしてまた、直腸内に押し寄せる白濁の侵略者。ざあざあ。ざあざあ。直腸が広がっていく。流れていく乳汁ははらわたをさかのぼり、大腸を重く沈ませる。下を向いたシャンテの、腹腔がわずかずつ膨らんでゆく。
「あああ、んくぅぅっ……く、苦しいっ……おなか、重いっ……っ」

たまらない、排泄の逼迫が肛門に襲いかかる。尻肉にぽつぽつと玉の汗が浮き上がる。直腸を満たしてその向こうまで圧迫する乳汁が、出たい出たいとだだを捏ねている。

二本目を引き抜かれて三本目を突っ込まれた。被虐に晒される薄桃色の肛門がヒクヒクと収縮を繰り返す。フリフリと可愛らしく、ミニスカートを揺さぶって苦悶を示しても、ミルク浣腸は止まってくれない。

「お腹っ……破れるっ。あ、あああっ……っ」

腹腔が、破裂しそうだ。全身に汗が噴き出して、けれどその肌は冷えている。

「苦しいっ……と、トイレにっ、トイレに行かせてっ……！」

下を向いて垂れ下がる、シャンテの腹はもう妊娠して数ヶ月を経た妊婦のようだった。

（もっ……漏れるっ！　漏れる、出しちゃうぅぅっ……！）

肛門をぎゅうと締めつけて、漏れそうになるのを必死でこらえる。押し寄せる便意に、頭の中がはち切れそうだ。うなじを真っ赤に呻くシャンテへ、カンタルは水袋を抜くと、

「しっかりと、肛門を締めておけ。これがカンタル流のボイストレーニングだ」

「っ、こ、んなっ……トレーニングが、あるものかっ……っ」

息も絶え絶えに呻く。カクカクと膝が震えている。内股につううと汗が流れる。

「おお、肌が紅色に染まって、なんともいやらしいわ」

汗に染まるうなじが艶やかだ。華やかな衣装は被虐の汗を吸い込んで、少女の肢体をほっそりと描き出す。苦しげに身動ぎする、その表情はどこか恍惚の色合いで、男の欲情を

そそるものがあった。
「うるさいっ……！　早くっ……私をトイレに行かせなさいっ！」
「まだまだ。さあ、口のトレーニングだ。このマイクを握ってもらおうか」
そう言ってカンタルは、己の男根を表に晒したのである。すでに赤黒く隆起した、それが雄々しく天を向く。その先端からはもう、透明なカウパー汁が染み出している。
「そのガキどもの傍で、伏せろ。四つん這いになれ」
「なにを、する気……」肛門の圧迫感は耐え難く、シャンテは膝を震わせながら、後輩たちの傍らへ四つ足をつく。と。カンタルが、少女たちの腕を掴んで引き寄せて。
「ら、乱暴はっ……！　って。ちょ、ちょっとっ⁉」
なんと、カンタルは、後輩たちの顔を——シャンテの尻の傍へ並べたのである。もしも漏らしてしまえば、吹き出す浣腸汁がちょうど直撃するくらいの位置だ。
「な、なんてことっ！」と、尻を逃がそうとする、けれど。
カンタルの爪先が、歌姫の横腹をトンと蹴った。
瞬間、全身に襲いくる、はらわたがひっくり返るような激震——！
「ひっ……っ、ぃ、あぁ、あぐぅうっっ……っ」
必死で、必死で、必死に、尻の孔に力を籠める。全身の筋肉がぎちぎちと硬直する。歯を食いしばって、なんとか耐えた。
お尻を、後輩の頭の上から逃がすどころじゃない。ただ耐え忍ぶだけでやっとだ。

「く、ううっ！　か、カンタルぅううっ……！」
「おお、怖い顔だ。ククク。それも糞を我慢していると思えば、滑稽なだけだなぁ」
そう言ってカンタルは床の上、シャンテの前に腰を下ろした。
目前にこの世で一番汚らわしいモノが鎮座する。太く、傘の張った、グロテスクな肉塊である。染み出す腐汁により濡れそぼつ醜悪なる逸物である。
「これがお前の舌を鍛える器具だ。さあ――存分に、舌を這わせろ」
「そうすれば――ト、トイレに、行けるのっ……」
「ああ。私を満足させる結果を出すことができれば、行かせてやろう」
腹腔をぎゅるぎゅると掻き混ぜる苦悶。脳を焦がすような排泄欲求にせき立てられて、シャンテは、小便を流す排泄器官に尻を突き出すようにして唇を近づける。
不浄の尻孔を舐めた歌姫の舌は、次いで小便を垂れ流す性器までを舐めさせられるのだ。
（なんて、屈辱っ……！　この私が、シャンテ・セイレンがっ……っ）
涙が滲む。とことんまで、舌を穢される。歌姫という存在を、貶めるためだけの行為だ。
「ほら。さっさと舐めるんだ。綺麗な歌を奏でるその舌でレロレロと舐めるのだよ」
「うるさいっうるさいうるさいっ……っ！　わかっているわよっ」
鼻が曲がるような、生ゴミのような匂い。生臭い腐汁が、ドクドクと垂れ落ちている。「うう」と呻き、目をぎゅうっと閉じて、少女は男根に可憐な舌を這わせた。
ぬちゅるっ、と、シャンテの唾液が汚肉を濡らす。

（気持ち悪いっ……！　気持ち悪い気持ち悪い気持ち悪いっ……っ！）
凄まじい嫌悪感に苛まれ、えずきがこみあげる。瞬間、肛門から力が抜けかけて、慌てて括約筋をぎゅうっと引き締める。
「ほれほれ。トイレに行きたいんだろう？　だったら早く、私を満足させることだな」
「ううう……っ！」
花びらのように薄い舌が、シャフトを撫でる。ぬちゅる、にちゅる。粘つく唾液を絡ませて、這いずる舌肉の表面に、なにかがこびりついていく。黄ばんだカスだ。たまらなく青臭いそのカスがねっちゃりと、歌姫の舌に乗っかっている。
「それはな、恥垢というのだ。チンカスともいうかな。ほれほれ、綺麗にしておくれ」
「こ、のっ……」歌士の舌が、まるで男根の清掃用具みたいな言い方に怒りがこみあげた。噛み千切ってやろうかなんてそんなことを考えながら、シャンテは男根を舐め回していく。
特に、傘の裏の部分にはそのチンカスとやらがこってり溜まっていて、腐ったチーズのようなその臭気は鼻孔が崩れて落ちそうなくらい強烈だ。
「うえぇっ……なんで……こんなに、溜めてるのよっ……」
「あまり風呂が好きでなくてな。最後に入ったのは……十日前だったかなぁ？」
「ひぃいっ！　ふっ、不潔っ！」
仰け反りかけたシャンテの髪をカンタルが、掴んで強引に引き寄せる。
「ほれ、舌のトレーニングを続けるんだ。そのまま、出してしまいたいのか？」

Z-FATE

「ひぃぃっ……！　あひぃぃっ！　あっ、ああっ、ングゥゥウッ！」
乱暴にボールが抜かれていく。長い間詰まっていた便秘が解消される、その何十倍もの排泄快美が肢体を蹂躙する。みっちり詰まった箱の中、黒革を軋ませて身を捩るシャンテの頭の裏にぽこぽこと、アヌスの開かれる音が響く。
（でっ、でてるっ……い、一気にでてりゅぅっ、おひり、ないぞう、抜けるぅぅっ）
一つ抜けたら皺孔はぎゅっと閉じ、またこじ開けられてぎゅっと閉じる。開かれっぱなしならまだしも楽であろうに、括約筋は連続しての開閉を強制されて悲鳴をあげるのだ。腰が吊り上がろうとしてガラスに阻まれ、壁面にのっぺりと尻紋を押しつける。
じゅぽっ……じゅぽんっ！　めりぃ、ぐぽぁっ！　皺孔が開閉を繰り返す。
「はへっ、あへぇあっ……！　くっひ、ひくっ、はへぇっ……」
桜色の唇を震わせる。悦びの音色。顎が震える。鳥肌が立つ。
そうして最後の一個までが抜けていって――。
じゅるっ、ずぽんっ、っじゅぽっ……ちゅぱぁっ。
「あ、はひっ……！　んひぃぃぃぃっ……！」
翡翠の瞳から涙を流して、唇を戦慄かせ、猫が身震いをするかのように全身を震わせて。
「ふぁあ……あ、あっ、ああっ～～～～～～～～～～～～～～～～～ッ！」
箱詰めの歌姫は、排泄の快楽に蕩けるような絶頂へと誘われてしまうのだった。
頭の裏に生温いものが溢れる。分泌される脳内麻薬に、舌を吐き出して喘ぐ。

――そんなシャンテを、少年が睨みつけている。
シャンテの格好なんてして、浅ましい姿でシャンテを貶めるなと憤っている。
「ははっ、尻の孔が開いたまんまだ」
「おお、真っ赤な内臓が丸見えだ。ひくひくしてやがる」
男たちの嘲笑がガラスの孔を潜り、尻孔を通って内臓に響く。ヒクっと、赤く染まった括約筋が反応して、けれど閉じようともしない。
まるで、なにかを入れて欲しいとねだっているみたいに。
「つ、つ、次は俺だぁっ！　俺はこっちでやるぞっ」
男が一人、尻のほうへ縋りついた。後ろ側に開いたたった一つの孔、そこに覗くのは淫猥な皺が広がり、真っ赤な腸壁をさらけ出す、粘膜の洞穴である。むわりと、湯気をすら昇らせる開いたその入り口へ、彼はペニスを押しつけた。
「……ぁっ」
声にならぬ震え。下腹が震えて、腸内にぬるりとしたものが滲み出す。アナルビーズで苛められた直腸は、次なる侵略者を予知して、直腸を腸汁にて濡らしたのだ。
はらわたの、生々しい匂いが香る。男はそれを吸い込んで、えへらと嗤った。
「おいおい、お前のそれ、でけぇなぁ。裂けるんじゃねえの？」
「大丈夫だろ。この女、ケツ孔まで開発済みの変態だしな」
（ひっ、えっ、な、ま、まさかっ、お、お尻にっ……！）

尻の孔に。糞をひり出す不浄の孔に、性器を突っ込もうというのか。
（だっ、だめっ、だめえっ、そんな、そんなとんでもないこと、しないでっ……！）
必死で尻肉を捩り、ガラスの孔から肛門を逃がそうとする。けれど無情なる監獄は少女の淡い抵抗など抑えつけて、哀れなる肛孔は為す術なく肉槍に串刺されてゆく。
メリィっ……メリメリっ、メリィッ！
「くひぃっ、くひぃ――――――ッ！」
熱い塊が皺孔をこじ開けて腸内を蹂躙していく。凄まじい圧迫感に背骨が軋む。頭蓋に襲いかかるのは肛門を逆さまに進んでゆく異物のおぞましい違和感である。
「あはぁっ、ああっ、んぐぐっ……くひっ、あ、ああっ……」
風船が膨らむように、お腹が膨らんでゆく錯覚。ミリメリと肉を軋ませて、男根が腸管を押し広げていく。肛門が裂けるのではないか、それほどの拡張感に生汗が噴出する。
男が腰を、ぐいっと押す。肉棒の先端が、腸管の下部をぐりりと抉り――。
「んふぁっ⁉　ああっ、あふうぅぅぅぅぅっッ！」
瞬間、下腹を焦がす快美の熱に、少女の身体は震え上がる。
薄皮一枚隔てた腸壁の向こう、押し込まれる亀頭に、子宮がぐちゅりと潰されていた。
「へへ、ずいぶんと気持ちよさそうじゃねえか。気持ちいいんだろ、お尻？」
「あうう……あう、あううっ……」
桃色の唇よりトロトロと涎を垂らしながら、少女は狭苦しい箱の中で背骨をうねらせる。

ぐっぱりと開ききったアヌスの輪は痛々しいほど真っ赤に染まり、男たちはその有様に、ぎらついた視線を向けている。

（ああっ、ふああっ……おしり、おしりにちんぽっ……どうして、ああっ）

ジンジンと、尻孔から響く痺れ。それは痛みであるはずなのに、脳髄は悦楽と錯覚する。男がぐぐっと腰を押す。ずぶずぶと埋まってゆく太い逸物に、歌姫は潰れたような吐息を漏らす。ガラスケースに押しつけられ浮き上がる肋骨が苦しげに蠢いていた。

ペニスに粘つき絡む腸肉、捻るように押し込まれ、アヌスがぐもっとへこんだ。

「んっ……くひゅっフっ……」

「おほっ、おほっ」と奇妙な呻きを漏らしながら、男が腰を引く。すると、ずるずるずるっ！　と直腸に並ぶ皺ヒダが後方へと擦られ引きずられてゆく。

「ヒィイ⁉　ヒグゥゥゥゥ〜〜〜〜ッ！」

はらわたを裏返すような感覚に背が反りあがった。ごつんと頭がガラスを叩いた。

（だめっ……、だめ、声に、出しちゃ、だめっ……ッ！）

ぐじゅぼっ！　と突っ込まれる。

「あひゃんっ！　ひぃいっ、おひり、おひりぃぃ……ッ！」

肛肉を揺すられ子宮が潰されて、全身に快楽の衝撃が駆け抜けた。火花の散るような、小さなアクメの噴出に頭の中が溶けてゆく。理性も知性も、その時だけは掻き消えた。ただ獣じみた悦欲だけが脳を染め上げる。

「言えよ、気持ちいいんだろう？　ああ？　言えっ、つってんだろっ」
思い出してしまう。
後輩に見られながら、カンタルに貫かれていた時を。
あの、快美をそのまま声に出した時の、たまらない悦楽を。
それに――彼女の中にある「歌姫」は反応してしまった。
「きもひぃいっっ……！　おひり、おしりきもちいいのぉっ……！」
肛門を、うんちを排泄する肉孔を、ほじくられるのが気持ちいいと。
「いいっ、いいのっ……！　んぐぅぅっ！　おひりっ、ずぼずぼ、いいのぉっ」
桜色の唇より奏でてしまった。
瞬間――シャンテの眉はとろりと蕩けた。ぎゅうぎゅう詰めの箱肉が赤く染まり、膝の裏や腋の下、ボンテージの内側が溢れ出す快美の汗にまみれてゆく。
直腸の半ばを埋め尽くす肉棒に腸肉が絡みつき、うにうにと揉み上げる。歌姫が喉を快く鳴らすたびに括約筋が反応し、一生懸命なご奉仕を行う。
「は、なんてぇ気持ちいいケツの孔だ。ホンモノの好き者だぜ、この女っ……」
なんという皮肉か。歌士としての長年の修練により、締めるも緩めるも自在な少女の括約筋は、無意識のうちに相手の悦びを引きずり出す手腕を得ていたのだ。
「いいのっ……あぁ、ああっ……わたひのぉ、シャンテのおひり、ずぼずぼぉおっ……」
ガラスケースに共鳴する、己の悦声が身体中を震わせる。

壁面に密着する肌という肌に己の声が沁み込んでくる。
「こ、こっちも興奮してくるぜ」「エロい声だしやがって、そんなに気持ちいいのか」
気持ちいい、いい、いい。声に出すのはこんなにも気持ちいい。
「きもひぃいのっ！　あ、ふぁああ――――っ」
高らかに、響くは艶めく肛門悦楽の歌。
「ははっ、スゲエ、尻の孔がこんなにひろがってるぜっ」
「ケツの肉も真っ赤っかだ。気持ちよさそうに、震えてやがら」
男たちは目の前の、箱詰め少女の痴態に理性を狂わせて、彼女の奏でる悦声が、シャンテのそれであることに気がつかない。どうでもいいのだ。コレが、シャンテであろうとなかろうと、ただ穢れた欲望を流し込む以上の必要性などないのだから。
――ただ。平静であった少年だけが、その声を本人のものだと気がついてしまった。
「……そ、んな。シャ……ン、テ」
己の悦声に狂い咲く歌姫よ、見よ――君に焦がれる少年の、絶望に満ちたその顔を。
(あ、あ……ごめん……ね)
彼のために流す一筋の涙は、尻壺をほじくる肉根の衝撃に散華する。
「ひぃぃ……おひりっ、ひぃっ、ふといのぉっ、ふとい、いいっ、ひぎぃーっ」
女扱いすらしない、乱暴な肉の抽送に腰が震える。ぐむっ、と奥深くを抉られると、ホットパンツが弾けそうなくらいに尻肉が張りつめて、頭の中に陶酔が広がっていく。

「……」ふらり、と少年が立ち上がり、近づいてきた。
尻孔快楽にむせび泣く口腔の前で立ち止まり、ズボンの、前を下ろした。
「……ねぇ、お姉ちゃん。僕のコレも気持ちよくしてよ――」
取り出した皮かむりの男根は、それまで見たどれよりも小さく、健気に勃起していた。
「あぁ……」悦楽の呻きに混じる歌姫の哀しげな声。小さく開いたその唇に、少年は包茎ペニスを押し込んでゆく。
ぶるるっ、と、彼の腰が震える。「よくも、よくも」と、呟いている。
舌を伸ばす。可愛らしい肉棒に絡ませる。たまらない罪悪感が魂を引き裂く。
糞孔がぐぽっぐぽっと責められて、腹の底まで衝撃が響く。それに急かされるようにして、シャンテは幼い肉棒へ舌を這わせる。
「んぐっ……ん、ちゅ、じゅるっ……んくふぅっ……ちゅ、ちゅ、んっ！　あひぇんッ」
ずろろっ、と腸壁を引き抜かれ尻孔が捲り返る。押し寄せる肛悦に頭蓋をフルフル揺すりながら、なにかの罪滅ぼしのように、少年のペニスをねちっこく舐めしゃぶる。
包皮の内に舌を入れ、ずるりと剥いて。ちゅぱちゅぱと唇でキスをして。
「ああぅ、うああっ……ちくしょうっ、ああっ……」
女の経験などないのであろう少年はもう腰をヒクつかせて射精しようとしていた。
「くそっ……くそっ、くそっ！　こんな、こんなのぉっ、僕はぁっ……」
怨嗟（えんさ）の呻きが突き刺さる。憧れてくれた。憧れられた。それを壊す。壊していく。

「むぐうっ、ううううっ……！　ああっ、おひりっ、おひりぃっ……！　もっとほじってぇ、もっとっ、わたひの、歌姫のケツ穴、ファンのチンポでほじってぇ……ッ！」

己の奏でる淫らな歌にシャンテは逃げてゆく。詩に感情移入するのは、十八番だから。

ずぶぶっ、ずぶぅ！　便所に響く粘ついた音、狭苦しい箱の中で、四肢のない蟲のようにシャンテの身体が蠢いている。鼻をヒクつかせ、青い肉棒をちゅるちゅる啜って、頬をとろりと緩ませる。下面に押し潰される双乳からすら、甘い悦が香ってくる。

ああ、疼く。秘肉が疼く。　触れることもできないアソコが熱い――。

「んふっ……ふ、き、きもひぃい？　ねぇ。私のオクチ、きもちいい？」

「うるさいっ……うるさいっ、うるさいっ……ううっ、ううっ！」

少年のペニスがぴくぴくって口の中で震えている。

これはカンタルと同じ反応だ。だから、気持ちいいのだろう。私のお尻をぐぼぐぼって擦り続けている、太い男根も痙攣している。

「ああっ、ひあっ……！　おひり、おくひぃ、きもちぃいよっ……！　ふぁあ、あ、あたひ、あたひぃ……ファンのみんなに、いっぱいきもちよくされちゃってるぅっ……」

押し寄せる歓喜に蝶の留まる口花が微笑みを描く。頬を窄ませ少年ペニスをちゅううと吸い上げ、舌をネロネロ蠢かせて初々しい海綿体を愛撫する。

「くふっ……んじゅるっ、おいひっ、ちゅ、んっじゅぐちゅっ……ふぁ……ッ」

ズボズボ尻孔がほじくられ背骨がごぉっと燃え上がる。極彩色の雷光が、脳髄で弾ける。

胎内が、疼いて疼いて疼いて疼いて――ヴァギナから小便のように愛液が飛び散った。
「イクっ……イクっ、ひぃい、ファンのちんぽでイっ……クゥ……！」
ビクビクビクビク小刻みに黒革ヒップが震え上がる。巻き起こる絶頂の予感に眉を溶かし瞳を上向かせる歌姫の、前後の孔でもまた欲望の噴出が巻き起こる。
「ぐぉぉっ！　出すぞ、尻ン中に、おっ、おぉおぉっ！」
びゅるるるっ！　びゅるぢゅ！　どびゅるっ！
「アヒィィイ！　おひり、じゃーめんがどびゅどびゅしてるぅぅっ」
尻の孔に大量の、灼熱子種汁をぶちまけられて、直腸まで焦げついた。
「う、うああっ！　シャンテっ……シャンテっ！」
涙を流す少年の包茎チンポからもびゅるびゅると、肉汁が流れ込む。口腔に溢れる生汁の味。ファンの精液がお腹と喉と、その両方に溢れ返る。わなわなと震える肢体。愛すべきファンたちに己の浅ましい姿を見せつけながら、箱詰めの歌姫は絶頂を歌う。
まるで、箱から音を響かせる、なにかの装置であるかのように。
「ふぁあっ、ああゅ！　ふ、ファンの……ザーメンでぇっ……！　あたひ、いっぱい、うれひぃっ……あっ、ああ、ふぁあぁあ――――――っ！」
身体の中がドロドロと、溶けていくようなエクスタシー。口の端に包茎ペニスをくわえたまま、唇から絶頂音を垂れ流す。眉尻は浅ましく垂れ落ちて、頬は緩み、瞳に光はない。舌の上にコッテリと、青臭いザーメン乗せたまま、翡翠の瞳は陶酔にドロリと濁る。

否定の言葉を紡いでも、吊り上がり気味の唇は仄かな喜悦に緩んでいる。はぁはぁと吐き出す吐息は淫らな熱を籠もらせて、頭の中は肉欲の獣に喰い破られていく。
「だめっ……だから、入れちゃ、だめっ……いれないでぇっ……」
太く熱く雄々しい肉棒。それまで入れていたのが偽物だから、なおさらにホンモノのそれを味わいたくて子宮がズクズク疼いている。あの張り出した傘でヒダを抉られたい、脈動する血管を膣管で感じたい、とぷとぷ滲む我慢汁を子宮に擦りつけたい――！
「カンタルのっ、チンポぉっ……！　オマンコに、入れちゃだめぇっ……」
ああ、ペニスがビクビク震えている。私のオマンコに、入りたいって涎を垂らしている。
「ククク。しかしシャンテよ、どうしてそんなに腰を擦りつける？　みんなが見ているのだぞ？　みんなの前で、入ってしまうぞ？」
桃色花弁の狭間、肉溝を鈴口でなぞるようにして、柳腰はゆるゆると弧月を描いていた。滲み出す愛液が男根を濡らし、まるで雨の日の傘である。
「ち……ちがう、の、これはっ……」
「そうか。みなにまた、それほど淫らな歌を聴かせたいのか。ああ。いいだろう」
と。その顔を愉悦に歪めてカンタルは――腰をぐっと突き出した。
――ヌプゥ。
「――あ」
ヌプッ……ぐぷっ……ぐちゅるっ！

「〜〜〜〜〜〜ッ、あっ、ああっ！　は、ひっ、はイッってきたぁあっ……！」
桃色ラビアが左右に割り開かれ膣管が広げられていく。潜り込んでくる灼熱の肉塊にヒダというヒダ肉が、恋人を抱擁するかのように歓喜とともにまとわりつく。
そうして、ぐちゅぶっ！　とカンタルのそれは根本まで埋没した。
「ああっ……！　だめってぇっ……入れちゃだめって言ったのにぃぃ……！」
熱くて硬くて逞しくて雄々しくて、ドクドク脈打つその、ああなんという生々しさ。何日もそれをお預けされていた股ぐらが嬉しそうに打ち震えて、眉の端がドロリと溶ける。
みなの熱い視線が私の肌をじりじりと焦がす。汚らわしい男に犯される歌姫を見ている。見られている。あんなに頑張って、歌いきったのに、結局は辱めを受ける姿を隠せなくて——その哀しみが、恥辱がどうしてか、お腹の奥をジュクジュクと昂らせた。
蛇のように躍る背骨。尻がぐずり、肛門がグムッと偽根を噛み締める。
「なんとも熱い中身よ。これほどに私のものを待ちわびていたのか」
汗にまみれてゆく純白ドレス。その清純な布地は淫らな歌姫の肌を透過させる。
「あぁあんっ……！　待って、なんてっ……んはっ、チンポなんてぇっ……」
「そうか？　ククッ、けれど——」
グンッ！　とカンタルが腰を突き上げた。亀頭槍がヅプリと子宮にめりこんで——。
「クヒィイインッ……！　ふぁ、あぁあっ⁉　ふ、かいぃ、あふぅうっ……ッ」
喉を反らして戦慄くシャンテ。さらにカンタルは押しつけた腰をこね回す。ドーナツ孔

がグリグリと捻り潰されて、熱湯を注ぎ込まれたような快美が下腹から噴出する。
「ウウッ、アフゥッ！　ら、ぞこっ、しきゅうらめっ……いま、みんな見てる、見てるからっ、聞いてりゅからっ……！　ングゥゥウ！　しきゅういじめひゃ、らめぇええっ」
頭蓋をゆるゆると左右に振る、その喉から漏れるのは蜂蜜をぶちまけたような蕩け声だ。眉尻も甘く溶け落ちて、美肌は桃色に染まりきっている。どこから見ても悦んでいるようにしか見えない、誇り高き歌姫の淫らな姿に観客たちから失笑が湧く。
「気持ちいいのだろう、シャンテ？」
「ちがぅっ、ちがうけろ、らめなのぉっ……！　んぐひっ、ひぃいんっ」
熱病に冒されたかのごとく脳髄は沸きたって、瞳は潤みに輝いている。
「ああっ……んぐぅっ！　ふ、ふがいっ、ひぃいっ……！」
胃まで子宮を押し上げるような突き上げにヴァギナの縁は巻き込まれ、引き抜かれようとすればペニスにみっちり喰らいついた膣管の、桃色粘膜までが引きずられる。肉唇は開閉を繰り返し、止めどなく溢れる交合の音が粘ついて弾ける。
「フフ。ほぉら、みなさんにも聞いてもらいなさいな」
床に転がっていた短杖をノイジーは拾い上げ、シャンテの股間へ近づけた。
「やぁあっ！　いやぁ、やめっ、だめっ、ノイジーぃいっ！」
じゅぶぅっ！　ぐじゅぶっ！　じゅぽっ、ぐじゅぽっ！
あまりにも淫猥な水音が、歌劇場の――センリツの国に響き渡る。

ペニスがヴァギナを擦る音、キュブキュブと空気の押し潰される音、戦慄く股関節の鳴る音、歌姫の、肢体が奏でる交合音が、観衆の耳を汚染して、どよめきが広がる。
「あっ、あああっ、だめ、聞かないでっ、きかないでぇっ」
聞かれている、聞かれているのだ。カンタルとのセックスの音を。
耳を塞ぎたくてもカンタルの手に防がれる。ぐじゅぶ。じゅぶる、ぐちゅぐちゅ。ぐちゅ。空気を揺さぶる淫音に共鳴するように股ぐらが震え、腰が捩れた。
「はぁあっ……んふぁ！　あんっ、ああっ、ふぁあぁあああッ！」
太陽に淡く輝く桃色の髪を鳥の羽がごとく振り乱し、シャンテは羞恥に美身を捩る。
「イヤらしい音だ。だが、これこそが、お前の身体が放つ声なのだよ」
「あぁっ……」
膣壺をメリメリと捲られてズリリという擦過音が響く。肩がヒクンッと跳ねて、迸る肉悦に「クフゥン」と甘い鼻息を漏らす。
「すげえ、エロい音だ。女の身体ってすげぇなぁ」「なによ、あの女が特別なのよ。最低。恥ずかしいっ……」「ああでも、俺、なんか……興奮してきた」
淫ら極まる演奏に、観客たちはいやらしく嗤い、それがまた肉肌を熱くする。
ねちゃあ。ぐちゅる。ずぶっ、ずぶぶっ。じゅちゅっ。
音、音、音。すべての音が淫らにすぎて、ああ、頭の中がおかしくなる――！
気持ちいい。気持ちいいのだ。

気持ちいいと――歌ってしまいたい。
カンタルのペニスとそれを模した張り形が、薄皮一枚隔ててごりゅごりゅと擦れあっている。尻孔と膣孔が一つになってしまったような拡張感に、赤らむ太股が艶めいて輝く。
「ほれ、シャンテ。いま、お前の中を埋めているのはなんなのだ？」
「あっ、ああっ……っ、はぁっ！　ふぁあっ……カンタルの、おちんぽぉっ……！」
カンタルの問いに、霞がかかる脳髄は素直に答えを返してしまう。
「そうだ。いま、お前の身体は私のチンポでどうなっているのだ？」
「わっ……わたしの、なかぁ……チンポで、いっぱいなのぉっ……！　お、おひりにカタイのがはいってるのにっ……、おまんこ、ぐりぐりするのぉっ！　んはっ、ああっ……」
言葉にすればするほどに――身体は熱く反応する。
「んひぃい！　あひっ！　じゅぼじゅぼって、おまんこ、じゅぼじゅぼしててぇっ……」
「素直になれ、歌姫よ。お前の身体はなんと言っている」
と――カンタルは、なお強くシャンテを抱いて子宮口にぐっと鈴口を押しつける。
「わ、わたひ、は、ぁ……」
コツコツとノックされて、ぐりぐりと子壺を潰された。
「ヒィ……いっ、やへぇ、あへぇ……っ」
「こんなにチンポをぎゅうぎゅう締めつける、下の唇はなんと歌いたがっている」
とぷとぷ溢れる我慢汁を塗りつけられ。それが美味しいと子宮は戦慄いて、ちゅうちゅ

うと吸い上げた。ああ、カンタルの味だと――陶酔が全身を満たしていく。
「わ……わたひ……わたひの、カラダッ……」
目の前にはカンタルの顔がある。嫌悪のみが彼に対する感情であったはずなのに。
いつの間にか、彼の首に腕を回している。恋人同士が睦み合うように胸を押しつけて、腰は勝手にウネっていやらしく肉棒を咀嚼する。
「きもひぃぃっ……！　きもちぃぃッて、言ってるの……！」
恥ずかしくも愛を告白する清純な乙女のように――俯き、顔を赤らめて、呻くように言ってしまった。とたん、下腹から吹き上げるような多幸感に満たされて、カラダのすべてがかぁっと熱せられる。軽いアクメすら、感じていたのだ。
ぐじゅ。ずぶずぶ。ぐず！　ずぶっ！
「ああっ、あーっ！　ちがう、ちがうう。だめぇぇぇ……っ！」
はらわたが二つの異物に攪拌される。必死で快楽を否定しようとするのに、カンタルの首に抱きつき、己から腰をグイングイン動かして肉棒を貪っていた。
歌姫の、雌犬のような有様に、後輩たちの眼差しは軽蔑のそれへと変貌した。
「ほら、見なさいな、あなたたち？　貧民など、しょせんこのようなものですわ」
ノイジーが後輩たちに向けて言う。悔しそうに唇を噛んで、三人はシャンテを睨みつけている。濡れそぼつ肉体を、官能に戦慄く四肢を、どろどろに崩れた美貌を。
「結局あれが、シャンテ様――シャンテの本性なのね」

「あんな女を慕っていたなんて。あんな女のために、処女を奪われたなんてっ……」
「気持ちよさそうにして……最ッ低――！」
冷めきった言の葉が、魂を凍らせる。
「ぁあっ……ちがう、わたしは、私はみんなをっ……みんなをまもりたくってぇっ」
ぽろぽろと瞳から涙が溢れでる。それは悦でなく哀の涙だ。
「それなのにっ……ぁ、ふぁあっ！　それ、な……のにぃっ……！　んきゅぅっ」
カンタルの辱めにも、ずぅっと耐えてきた。みんなを、あなたたちを守るために。
（ああ、そんな目で――私を見ないで）
でないと私も、もう。どうなってしまうかわからないから。
「ふぁあっ……！　ああっ！　きもひいぃのぉっ、よすぎるのぉっ……！　だれか、だれかぁ……たす、け……、たひゅけてぇっ……！」
理性を壊すような悦楽の地獄から逃げ出そうと、カンタルの肩ごしに手を伸ばす。救いを求めるかのような両の手は観客席に伸ばされていて――。
「――ぁ、あ……」悦虐の歌姫は、絶望に瞳を見開いた。

――淫らな女め！　――なにが歌姫だ！　――見損なったわ。
――恥知らず！　――浅ましい。　――雌豚！　――インラン！
チンポを突っ込まれてあんなによがってやがるぜ。見られるのがよっぽど好きなのね。

短いスカートひらひらさせて、男の目線に悦んでいたんでしょう。あんなにおまんこぐちゃぐちゃにして。国中に見られているのに、それも愉しいんだろうな。あんな女の声に感動していたのか。幻滅。変態。耳が腐りそう。

「いやぁっ……あ、あぁあぁっ……！」

黒々とした怨嗟の声に、心はなおも刻まれ、押し潰されてゆく。

人々に愛され、親しまれ、熱狂を受けたシャンテ・セイレン。

高みにあったがゆえに、その偶像は――底の深い奈落へ堕とされてしまうのだ。

「ひどいっ……ちがう、わたしはっ……そんな、ちがう、のにっ……！」

縋るように、聖歌隊へ目を向ける。こちらを見つめる、後輩たち。

リィナが、ぽつりと呟いた。

――死んじゃえ、雌豚。

「……ぁ、あ、あ」

全身が虚脱する。哀しく、カンタルの胸に縋りつく。

なにもかも――失った。なくしてしまった。

「ククク。そう気落ちするな。お前には、私がいるではないか」

耳元でそんな声がして、下腹がぐぃと突き上げられる。思考を止めた脳髄に、その悦刺激は痛いほどに響いた。膣肉がネトネトと反応して、肩がビクンとはね上がる。

「ふぁあっ……！　あふぁっ、ああ、カンタルぅっ……！」
見開く瞳から溢れる涙、それは哀も悦も飛び越えて、歓喜に満ちていた。自分の中身をいっぱいに満たす熱い感触。心に穿たれた虚をもそれが埋めてくれる気がした。
「……ねぇ。もっと。あなたので、もっと深く、私を埋めて……」
上目遣いにカンタルを見上げ、桜色の唇を綻ばせ、シャンテはそう言っていた。
鈴口と子宮口はこれ以上ないほどに濃密なディープキスを重ねていて、けれどまだ足りない。子宮はドクドク疼いて、お腹の中を灼くくらいに熱くなっている。
この身体はまるで恋する乙女のようだ。そんな歌詞を、何度歌っただろうか。
「ククク。こうか――なっ」グチィ！　と、突き上げるカンタルの剛棒で赤子袋がひしゃげた。腰が跳ねて、背筋が痙攣する。頭の中で火花が散って、肢体が刹那、硬直した。
「んひぃぃぃ……ッ！　あ、はっ……。アソコ、ずぶってされて……、イッちゃったぁ……。んっ、ふぁ……」
押し寄せた小さなオルガズムに、歌姫はとろりと瞳を潤ませるのだった。
けれどまだまだ足りないと、震える腰をカンタルの腹を擦りつけて、トロトロマンコの奥から甘い蜜汁を垂れ流す。ケツ穴から覗く偽ペニスはひとりでにぐにぃぐにぃと蠢いて、少女のはらわたがどれほど物足りなさにぐずっているのかを見せつけていた。
「気持ちいいか、シャンテ？」
「きもちぃぃっ……ですぅ。もっと、もっと、わたしのオマンコをこすってちょうだいっ

……。私のあなを、いっぱいにしてぇ。ぜんぶ、ぜんぶっ……！」
「ならば唱えシャンテ。今の、お前の気持ちを思うさま、みなに聞かせてやれ」
——ああ、そうだ。みんなに教えてあげたい。
この感情を伝えたい。共有したい。みんなと、一体になりたい。
その願いは少女が貧民であったころに抱いた最初のキモチで——。
「あはっ……みんなっ……！　おちんぽぉっ、きもひぃいよぉぉ……！　んっ、んぅううっ、えっちって、とってもいいのぉっ、ほら、みんなも、歌おうよぉっ……！」
天へ向け少女は己の淫らな有様を歓喜とともに絶唱する。
「ハァアッ、ヒァっ！　ああっ、ふぁあ——————————♪！」
——迸る、魔歌。
その淫らなる艶声は——膨大な魔力を伴い、歌劇場を覆い尽くした。
いや、それはどこまでも。投影魔術に誘われ、センリツのすべてに広がってゆく。

そして国は狂った。

歌劇場は淫らなる魔界へと没してゆく。
「あっ、ああんっ！」「ふぁあっ！　んほぉっ！」「ひぃいんっ……！」
あらゆる人間があらゆる人間を襲っていた。親兄弟を、友人を、ただ隣に座っていただ

けの人間を。誰彼の区別なく服を剥ぎ肌に舌を這わせて味わいながら肉を穿つ。
父親が娘を犯している。犯される娘は歓喜にむせび泣いている。
息子が母親を犯している。まるで獣のように己の通った産道を肉棒で味わっている。
兄を、姉を、妹を、弟を――家族であろうとなかろうと、彼らの前にあってそれはただの肉でしかなく、その場に居合わせたすべての人間はただ欲望の赴くままそれを貪るのだ。
王侯貴族であろうとそれに変わりはない。
王様が、まだ幼い娘を貫いている。センリツの次代を担うはずであった少女は、青臭いワレメを血に濡らし、ぬちゅぬちゅと肉棒で抉られて、快悦の悲鳴をあげていた。
「イクッ！　ああーっ、あっ、イクゥ――ッ！」
実の父親に穢されて、血まみれラビアを震わせて戦慄く姫君のなんと痛ましいことか。
貴婦人たちが押し寄せる市民に犯されている。
豪奢なドレスを剥ぎ取られ、手入れの行き届いた肌を淫欲の獣に舐められる。犬のような姿勢を取らされて前から後ろから貫かれ、甘ったるい悦声を響かせる。
「ひぃいんっ！　いやぁっ、やめっ、やめてぇっ！」
それは聖歌隊の少女たちにも襲いかかるのだ。武器を捨て、殺到してくる警備兵。幼い少女の身体を組み敷いて、成長途上の淫肉へ無理矢理に己の槍を挿入する。ずぶずぶと肉を穿たれて、喉をからして叫ぶ悲鳴には、苦痛の色が濃くあった。
「だれかたすけ……ああっ！」「いやぁっ……いやだぁ、ひぎぃっ！」「ふぁああ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ？

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて！ キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

あなたのキモチイイをお手伝い!

キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!

二次元ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!

コミックアンリアル
COMIC UNREAL

メガミクライシス
MEGAMI CRISIS

詳しくはKTCのオフィシャルサイトにて! キルタイム 検索 Click

電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

※いずれも18歳未満の方は購入できません。